

天に在りては願はくは比翼の鳥となり、
地に在りては願はくは連理の枝とならん。



在天願作比翼鳥在地願為連理枝

連理の枝

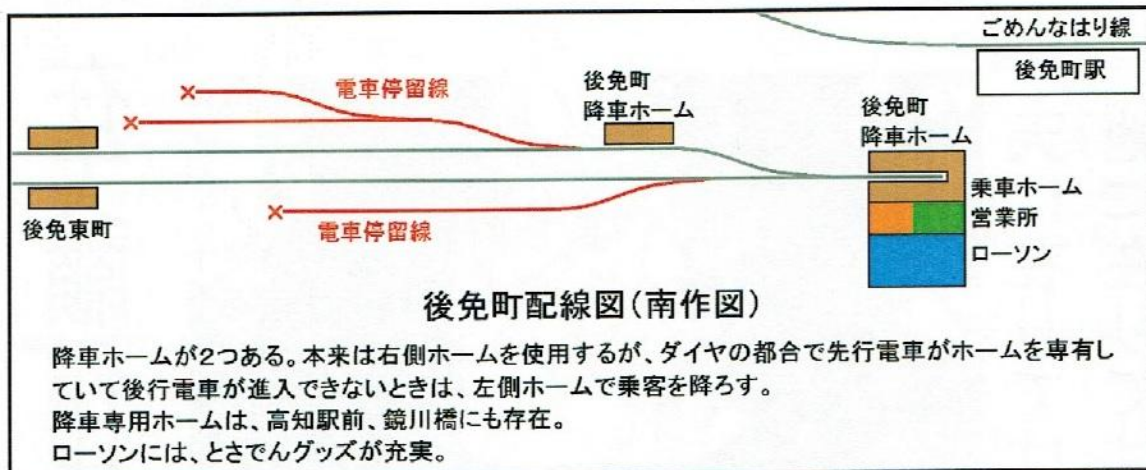
(南国市桑ノ川 地主神社の鳥居杉)

ジオロジー鉄道の旅 後免編（その1）

南 寿宏

1. TE32 後免町

とさでん交通の終点。昭和49年まで、土電安芸線の乗り換え駅。市内電車600系2両編成が安芸まで乗り入れていた。



土電安芸線の廃線跡は下の国土地理院地形図から想像できる。



2. TE31 後免東町

対面ホームが旧国道の北にひっそりとたたずむ。

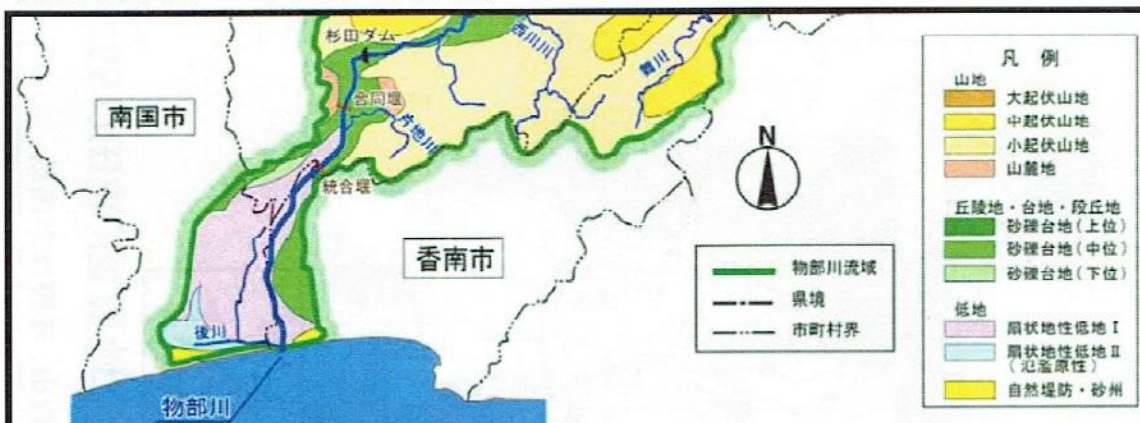
後免町との間の踏切を北へ抜け、JR後免駅方面に向かうと、土電安芸線跡と思われる細道につながる。この細道は、ごめんなはり線高架橋の30mほど西。



後免・後免町間の廃線跡と舟入川(国土地理院地形図に加筆)

ごめんなはり線が舟入川と交差するあたりで、北と南の標高差に注意。
 ここは、かつての物部川扇状地の西縁。

物部川扇状地については、下図参照。



物部川の概要(四国地方整備局HPより引用)

物部川下流域の西側(右岸)には、合同堰の下流付近を扇頂部として、南西方向に向け扇状地性低地である香長平野が開けており、現在の物部川は、扇状地の東寄りを南へ流れる。

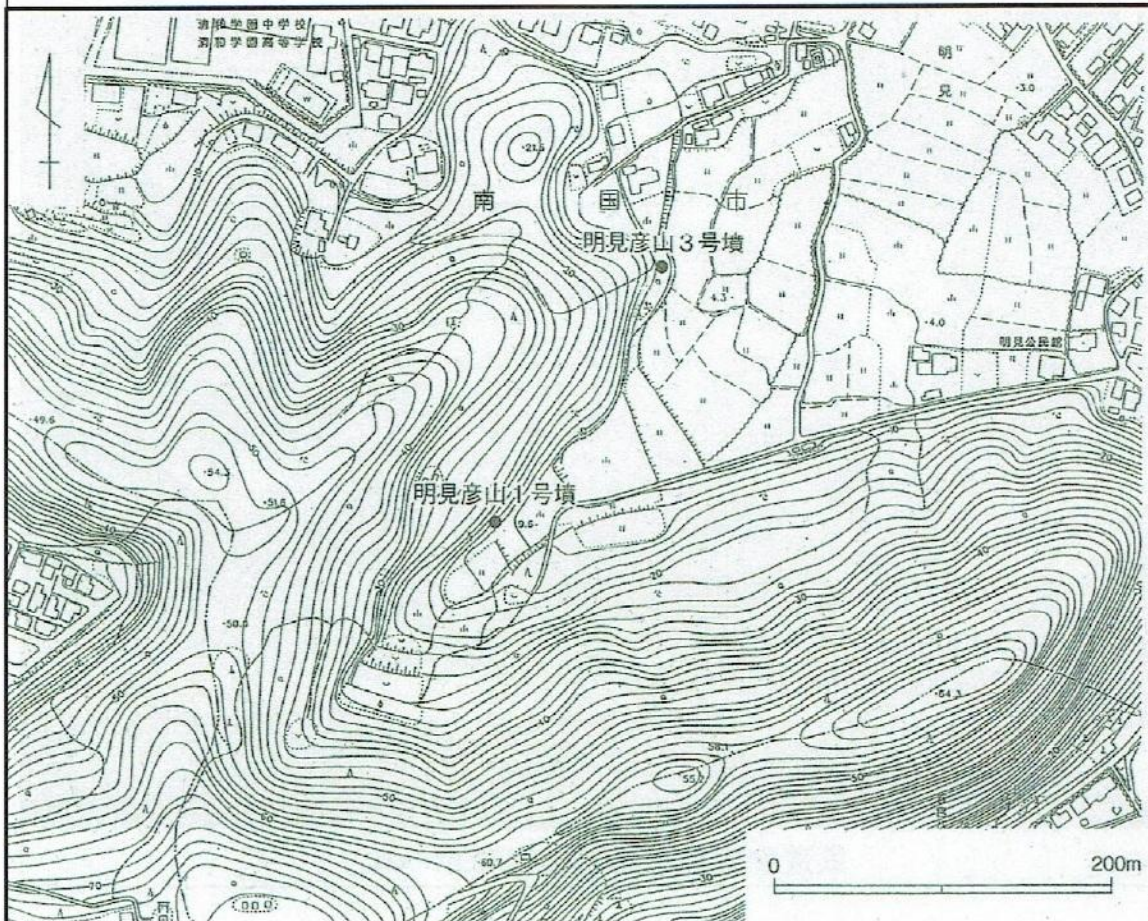
扇状地 (センジョウチ) alluvial fan

河川が形成した、谷口を扇頂とする半円錐状の堆積地形。沖積扇状地とも。山麓では河床勾配が減少し、川幅が広がり、水深が浅くなって河流は運搬力が減じ、谷口

停留所から南へ小丘陵を越え、その南麓を西方へむかって5、6分歩くと、明見彦山古墳群3基のうちの1号古墳に着く。この1号墳に、南国市小蓮の小蓮古墳、高知市朝倉の朝倉古墳をあわせて、土佐の三大古墳という。

この明見彦山1号古墳は7世紀中頃のもので、横穴式石室の構造をもち、羨道（せんどう）の長さは3m、玄室の奥行5.9m、玄室奥の幅2.5mの大きさで、谷から少し上がった木立のなかに、羨道の口を南に開いて横たわる。1号古墳のすぐ近くの墓地の後方に3号古墳がある。こちらは封土の一部を残すだけで、構造は1号墳と同様だが、羨道の長さは1.8m、玄室の奥行5.8mと、やや小さい。1号古墳に先行して築かれたようである。直刀・刀子・馬具・銀環・鉄鎌など、県下の古墳では特に出土品の種類が多いことで注目される。2号墳は破壊されて残っていない。

[山本大監修 (1989), 高知県高等学校教育研究会歴史部会編 高知県の歴史散歩]



明見彦山古墳地形図(高知県埋蔵文化財センター提供)

古墳（コフン） ancient mound tomb

古墳時代に作った墓の総称。円形の主丘に台形の丘を付属させた形に土を盛って築いた巨大な前方後円墳がその代表。最古の奈良県箸墓古墳は墳丘全長276m。5世紀の最大例は大阪府大山陵古墳で墳丘全長486m。ほかに前方後方墳、円墳、方墳もある。岩壁に横から墓室を掘った横穴墳も古墳のうちに入れる。前方後円墳は、

畿内と岡山県に巨大なものが集中し、山形・岩手県から鹿児島県まで分布。3、4世紀は支配階級の上位の者だけを埋葬した地域の首長墓が主で、その本質は墓というよりも首長権継承の場であるという考えが有力。5世紀になると、規模が最大化する一方、被葬者の範囲も拡大。6世紀には「・・・千塚」と呼ばれる横穴式石室に多人数を埋葬した小古墳の大群集をつくる。7世紀になると、西日本では支配階級のものだけになるが、東日本ではなおその築造が続く。8世紀になり、全国的に古墳築造の風習はやむ。

〔春成秀爾、地学団体研究会編 新版地学事典〕

最後に、明見橋のホームを見てみよう。この玄関は何？



鉄道珍風景「玄関を出ればホーム」

4. TE22 一条橋

一条橋の名の由来は、西100mの山上にある大津城址による。大津城は天竺氏の居城であったが、長宗我部氏に滅ぼされた。その後、中村から一条氏の御曹子一条内政（ただまさ）を迎え、大津御所と称したが、長宗我部元親は内政に謀反の疑いをかけ、追放。これで、土佐一条氏は滅亡した。元親は歴史好きの女子、いわゆる『歴女』に人気があるが、戦国大名としてこのようなこともしていた。なお、隣の清和学園前ホーム横から10mほど階段を上ると、高岡層のチャートの露頭がある。



鉄道珍風景「一条橋から隣を見ると」

一条橋・清和学園前間は、日本一短い駅間距離。その距離はわずか、63m。清和女子中学校・高等学校がこの地に移った際に、停留所を新設したことによる。当時は、朝ラッシュ時に一条橋行の電車があり、よく利用した。平成になったばかりの頃のお話。

次回予告

土佐日記船出の地の考察と浦戸湾干拓の歴史
お楽しみに。

とさでん交通後免線 停留所コード一覧（南寿宏・私案）

TE01	デンテツターミナルビル前	TE09	西高須	TE17	鹿児	TE25	小竈通
TE02	菜園場町	TE10	県立美術館通	TE18	舟戸	TE26	篠原
TE03	宝永町	TE11	高須	TE19	北浦	TE27	住吉通
TE04	知寄町一丁目	TE12	文珠通	TE20	領石通	TE28	東工業前
TE05	知寄町二丁目	TE13	介良通	TE21	清和学院前	TE29	後免西町
TE06	知寄町	TE14	新木	TE22	一条橋	TE30	後免中町
TE07	知寄町三丁目	TE15	東新木	TE23	明見橋	TE31	後免東町
TE08	葛島橋東詰	TE16	田辺島通	TE24	長崎	TE32	後免町

万葉の地学

つきかたぶきぬ

南 寿宏

今回は、万葉集最大の詠み手の一人、柿本人麿の歌を採り上げる。万葉の地学と言っておきながら、それほど地学と関連がないことはご容赦願う。(最後に地学の問題を出すので、それで許してね。)

東	野炎	立所見而	反見為者	月西渡	万葉集 巻一 48
東の	野に炎の	立つ見えて	かへり見すれば	月傾きぬ	柿本人麿
ひむがしの	のにかぎろひの	たつみえて	かへりみすれば	つきかたぶきぬ	
東の野に朝の光がさしてきた。ふりかえって見れば、月が西の空に移っている。					

この東野の歌は、中学校もしくは高等学校の国語の教科書に必ず載っているの、ご存じの方も多と思う。人麿の代表作である。

この歌の上の句(一二三句)と第五句には、古来より複数の読みが存在するので、紹介する。

(1) 上の句『東野炎立所見而』

この歌の上の句『東野炎立所見而』を『ひむがしの のにかぎろひの たつみえて』と最初に読んだのは江戸時代の国学者賀茂真淵で、それ以前は『あづまのの けぶりのたてる ところみて』であった。

玉葉集 (真淵以前)	東野 炎立 所見而 あづまのの けぶりのたてる ところみて
(玉葉集は鎌倉時代後期の勅撰和歌集。興味ある方は、google 等の検索エンジンでお調べ願う。東野の歌は巻八 1124)	

このように原文と読みを並べて表示すると、真淵以前の読みは万葉仮名の原文に実に忠実であることが分かる。しかし、真淵大人はこれに満足しなかったようである。

賀茂真淵	東 野炎 立所見而 ひむがしの のにかぎろひの たつみえて
------	----------------------------------

二つを並べると、真淵の読みの方が洗練されているような気がするし、洗練されているからこそ、この読みが採用されたのであろう。しかし、人麿が詠んだのはどっちなのか。あるいは、これらとは異なる第三の読みが正しいのか。今となつては、分かるすべはない。(万葉集に複数回登場するが現存していない人麿歌集が見つければ、決着がつくかも知れないが、1,300年以上前のものが発見される可能性は極めて低い。)

(2) 第五句『月西渡』

第五句『月西渡』は、意味は明け方、月が天頂を通り越し、西に移ってきた、ということ、素直に『つきにしわたる』と読めば、まったく問題はない。しかし、鎌倉時代に仙覚が万葉集のほぼすべての歌に読みを施した際に、『月西渡』を『つきかたぶきぬ』と読んだことから、それが一般となった。これに異議を唱え、『つきにしわたる』を主張したのが江戸時代の国学者、契沖である。

手元にある出版物を見る。すると、『つきかたぶきぬ』は講談社文庫(令和の生みの親と言われる中西進の編集)を初め、ほぼすべての本で採用されているが、『つきにしわたる』は伊藤博(萬葉集釋注一 集英社文庫ヘリテージシリーズ)のみである。

この伊藤の読みは独特である。

「ひむがしの のにはかぎろひ たつみえて かへりみすれば つきにしわたる」

この読みについての伊藤の解説は、上述『萬葉集釋注— p479-480』を参照されたい。

(3) 別種の万葉仮名

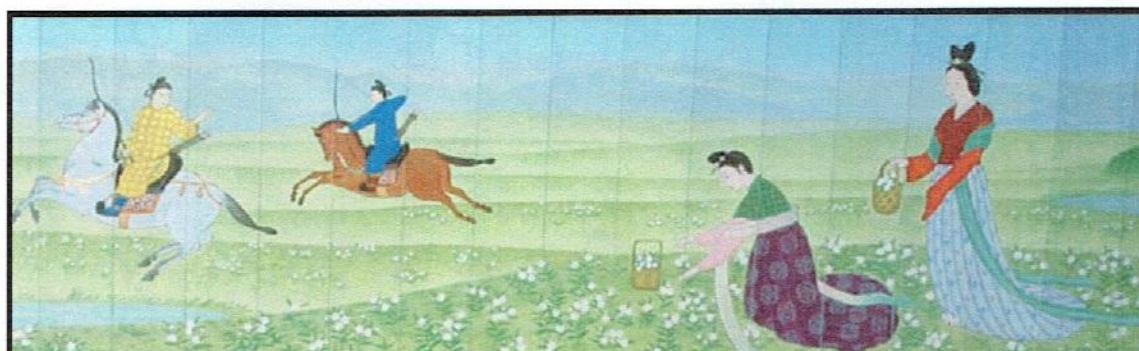
さて、東野の歌を、次の『あかねさす』の歌と比較してほしい。

茜草指	武良前野逝	標野行	野守者不見哉	君之袖布流	万葉集 卷一 20 額田王
茜さす	紫野行き	標野行き	野守は見ずや	君が袖振る	
あかねさす	むらさきのゆき	しめのゆき	のもりはみずや	きみがそでふる	
(愛しいあなたは) あかね色の紫の野を行き、しめ縄を張った野を行く。野の番人が見るではないか、そんなに袖を振って私を見つめたら。					

『あかねさす』はほぼ一言一句が万葉仮名と対応しており、容易に元歌が復元でき、曖昧さは解消される。助詞等を省略し、西渡の意識を含め、復元が困難な東野との違いは歴然である。

万葉仮名には、このように、意味だけ表したものと、読みを一言一句忠実に表したものが存在する。どちらが元歌の正確な復元が容易かは、言うまでもなからう。

このように、万葉集の読みには、どうしても、曖昧さがつきまとうのであるが、万葉集原文が『あかねさす』のように、例えば、『月二四綿留(ツキニシヅル)』あるいは『都木方武絹(ツキカヅキヌ)』と表示されていれば、このような曖昧さは雲散霧消するのだが、それは言わば、無いものねだりであろう。



君が袖振るレリーフ

滋賀県東近江市船岡山万葉の森公園設置

(4) 余談

この歌は、後世、俳句にアレンジされている。

菜の花や 月は東に 日は西に	与謝蕪村
----------------	------

与謝蕪村の代表作。脱力ですね、悪い意味ではなく。

(5) そろそろ問題を

ところで、この東野の歌は、軽皇子(後の文武天皇)が宇陀の山野(現 奈良県宇陀市)で遊猟したときに人麿が詠んだ長歌1首、短歌4首のなかの一首である(万葉集 卷一 45-49)。そこで問題。

問題	人麿がこの歌群を詠んだのは、旧暦の何月何日か。5首の内容から論ぜよ。
ヒント	玉かざる 夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に(万葉集 卷一 45) 黄葉の過ぎにし君が(万葉集 卷一 47)

解答・解説は次号で。

■新型コロナウイルスCOVID19の第三波のさなか、いかがお過ごしでしょうか。

本年度の本会の野外もしくは対人活動は、すべて中止といたします。ご了承くださいませよう、お願いいたします。来年度はどうなるでしょうか。

■本年度3号の会報をお届けします。

紙上巡検の連載を開始しました。野外巡検ができないので、その代替とお考えください。本原稿を持って実際に現地を訪れることも可能です。ただし、寒さ対策およびCOVID対策は十分に。三密は避けましょう。

来年度は、高知みらい科学館との共催で、とさでん電車を舞台にした小・中学生対象の巡検を実施すべく、みらい科学館と協議中です。少人数（各会1～2名）でしたら会員の皆さまの同行も可能です。費用は傷害保険100円と一日乗車券1,000円のみ。ただし、スタッフとして、子どもたちの安全確認という仕事があります。

■本号の取材中、とさでん後免町でどこかの大学の鉄道研究会と遭遇。その時の会話が今回の原稿に生かされています。これからレンタカーで香川へ向かうということで、短時間でしたが、『鉄』どうしの楽しい時間を過ごしました。彼らの報告がどこかの大学鉄研HPに掲載されていると思うのですが、未発見です。発見された方は、ご一報いただければ、感謝です。

■今、Jane Austen にはまっています。“PRIDE and PREJUDICE”に続き、“SENSE and SENSIBILITY”に取りかかっています（中野康司訳 ちくま文庫）。

前者の冒頭は、夏目漱石がその著『文学論』で絶賛したそうです。

“It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.”

「独りもので、金があるといえば、あとはきっと細君をほしがっているにちがいない、というのが、世間一般のいわば公認真理といってよい。（中野好夫訳 新潮文庫旧訳）」新潮文庫中野旧訳は、小山太一新訳となり、中野の昭和の名訳は廃刊になりました。

■会報原稿募集中。皆さん、よろしく。

令和2年度会員数（令和2年12月15日現在）

正会員	大学生会員	中高会員	小学生会員	家族会員	名誉会員	合 計
19	1	0	0	2	2	24